
面倒事に巻き込まれた！！

美奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

面倒事に巻き込まれた！！

【Zコード】

Z3942Z

【作者名】

美奈

【あらすじ】

エルシア・サマーニは少し気が強いことにでもいるような」く普通の少女。そんなエルシアが嫌いなものが面倒事。そんなエルシアの前に一通の手紙が届く。その一通の手紙が、エルシアの平和な日常を奪っていく。

プロローグ（前書き）

初めまして & 短編をじこ覧頂いた方はお久しぶりです！

連載作品を全て消し、1からこれを書いていこうと思つています。
駄文ですがどうぞよろしくお願ひします m (^ ^) m

プロローグ

「…………」フェス王国の中央に位置するファスにある一人の少女がいた。

「エルー！手紙だよ！」

「はいはい！今行くわ！！」

少女はごく普通の、下町で働いているエルシア・サマー。美人とは程遠い、平凡な顔立ち。どちらかというと整ってはいるが、美人と言つまでではない。

面倒な事が大嫌いな彼女は平和な日常を過ごしていた。筈だった。平和な日常を過ごしていた彼女がこの一通の手紙で自分の人生が変わるなど思つてもみなかつただろう。

これはどこにでも居る極普通の少女とその少女の周りで、起きる出来事の話である。

「な、なにこれ…………？？」

プロローグ（後書き）

今後ともよろしくお願い致します。

1話 「不満よーとこつか面倒よー」（前書き）

連続投稿。頑張ります（^-^）

1話 「不満よーとこつか面倒よー」

「なんのなんの……」

そう言つて目の前の手紙を私は床に放り投げる。

私の名前はエルシア・サマー。このミフェス王国のファスに住む普通の女の子。周りからは強気だと言われる。ええ、自覚します。ちょっと強気なことくらい。

私は面倒事が大嫌い。

日々の処理が面倒だし、疲れるし、イライラもする。
私は平凡なだけあってそれほど面倒事には慣れていない。
勿論、今後も慣れるような事はない。……はず。

慣れなくて面倒事には巻き込まれるのが平凡な人の特徴。そして私は今、最も厄介な面倒事に巻き込まれようとしていた。

私が先程、床に投げ出したのは……城からの招待状。何に招待されたのか、と聞かれればこう答えるしかない。

「妃選び……」

私はそう呟いた。何故、私の様な下町の娘が選ばれるのかはわからぬ。ただ、前王妃様が庶民って影響もあるのだろうけど……冗談じやない！

「何を好んで妃に何かならなきやいけないのよ！私は平凡な生活を求めてるのに！」

私はそう言つて誰もいない部屋の中で手紙を睨む。私を招待したこの国的第一王子、フレイアル・ジエーンはとても綺麗なお顔だと聞いた。聞いただけ。私はそのお顔を拝見した事は一度もない。第一私はあまり王子というものを好きじやない。私は性格が捻じ曲がっているのか、それとも子供の頃の出来事が原因なのかは知らないけど王族というものを嫌つてゐる。世間的にどうかと自分でも思つてるんだけど仕方ない。

「あ、そうだ！アイサにも来てるかも！」

私は友人、アイサの元へと急ぐ。アイサの家に着いた私はアイサを呼んだ。

「アイサー！
「はーい」

中からのんびりとした声が聞こえてきた。と思うと、玄関の扉が開き、アイサがひょっこりと出てきた。

「アイサ！アイサの所に招待状來た？」
「招待状？そんなの来てないよ。誰の？」
「王子の」
「…へ？」

アイサはキヨトンとしていて訳がわからないように首を傾げた。私が手に握っていた手紙を広げて見せるとアイサは目を見開き私と手紙を交互に見ていた。

「よかつたじやない！エルー！！」

「何がよーひつとも良くないわー何でこんな所に呼ばれなきゃいけないのー！」

「何？ エルーは不満なの？」

「不満よー！ というか面倒よー！」

私は目の前の友人に言った。友人は『面倒』という言葉を聞いて苦笑する。私は自分が選ばれるなんてこれっぽっちも思っていない。というか思う方が可笑しい。何でこんな下町の娘を妃に選ぶのか。しかもこんな平凡の。私はただ、呼んでみただけだろう。だから別にここまで拒む必要はない。のだが。

「何で令嬢様達に罵られに行かなきやならないのよー」「でもお城のお食事つて豪華だよ？ 食べ放題だよ？」

「…」

私はアイサの言葉に反応する。豪華、食べ放題…庶民の私は贅沢が出来ない。よって城の食べ物はこちそつだ。私にとつてはとても有り難い事。

「あまりにも面倒すきて忘れてた… よしー食べ放題ーー」「頑張ってきてねえ」

アイサがそういうのを聞いて私はアイサに向かって手を振った。つて言つても、まだなんだけどね。後、一週間。あと一週間でこちそうが食べれる…！

1話 「不満よーとこつか面倒よー」（後書き）

サブタイトル気付きましたでしょうか？

文中のエルシアの台詞からとっています。

なんといつが、サブタイトルを考えるのが難しくて…
悩んで末、サブタイトルは文中から取る、とこことになりました。

これからもよろしくお願いします。

2話 「迷子だ…」

早くも一週間が経つた。…え?何かいけなかつた?だつてこの一週間つて特になにもなかつたのよ。ええそうね。アイサに恋人がいたということを除いては。まあこの話は後にして。私は今、馬車の中にいる。なぜかつて?家の前まで馬車が来たからよ…玄関の扉を開けたらそこには馬車がいました。つてなにそれ!?ものすごい迷惑よ!なにその気づかい!いらぬいわ!

「サマー様。到着いたしました」

執事らしき人が私に向かって二コリと微笑む。私も二コリと微笑みながらお礼を言う。本当は微笑みたくはないのだけれど。仕方ないよ。あんまり悪印象持たれると面倒な事になる。私はその人の後についていく。そして大きな扉を開くと、様々な女性が素晴らしい自分が着飾つておりました。

(わあー香水くさい…)

私は内心そう思いながら、顔には出さないようにしていた。私は香水はつけない。だって臭いじゃない。何を好んであれを大量につけるか、私には全く理解できないのよ。私はそう思いながら人が少ない窓際の一角に歩いて行った。まだ第一王子は来ていみたい。どうりで、令嬢達の間に怖い雰囲気が漂つているわけよ。

「いらっしゃるかしら」

私はそう言って窓の近くに立つた。どうやら私の平凡顔は特に目立たないようね。誰もこちらを見ようとしないもの。私としてはこつ

ちの方が好都合。私はワクワクしながら第一王子の登場を待つ。一刻も早く第一王子に来ていただきたい。そしたらお食事が食べれるじゃない！私はワクワクしながら待っていたのだが……第一王子が時間になつても現れない。私は流石にイライラし始めたこの空気に耐え切れなくなり、部屋の外へ出た。

「はあ～気持ちいいー」

私は部屋を出た所で肩に入つていた力を抜いた。しかし、私は初めて目にする目の前の光景に目を見開く。

「花多いっ！」

別に花が嫌いだというわけじゃない。どっちかというと好きな方だ。うん。でも。

「ここお城だよね……？」

お城の中に、一面を覆い尽くす程のお花畠があるだろうか普通。私はその光景に少し疑問を持つて後ろを振り向いてみる。そこには先程、出てきた部屋の扉が存在する。うん。ここはお城だ。決してお花畠ではない。

「と、取り敢えず、移動…」

私はそう言つて右左をキヨロキヨロする。正直、そこに今すぐ帰る気はない。というか帰りたくない。何を好んであんな居心地の悪い場所にいなければいけないのか。私はそう思いながら左に進んだ。左には何があるのか私は全く知らなかつた。いや、庶民が知つてたらすごいです。それから私はだいぶ歩いたのだけれど……うん。正直

に言います。

「迷子だ…」

私はそう言って頭を抱えた。というかこの年になつて迷子になると
は思いませんでした。はい。私は周りをキヨロキヨロを見る。人の
気配なし、来た道もわからない。绝望的だア…そう思つていたその
時。ある一つの部屋が開き、男性が出てきた。どこの誰だか知らな
いけど…ナイスです…!!

「あのつー…」

私は必死にその男性に近づく。その男性は私の存在に気がつくと少
し顔を歪めたような気もしたが私はその疑問を置いといてまず、自
分の問題から解決していくことにした。

「失礼ながら、表門はどうぞこちらに御座いますでしょうか
「表門、か？」

私が男性に問うと、その男性は意外そうに聞いてきた。他に別の事
を問われるとしても思つていたのかな。その男性は意外そうな顔をし
たまま私の後ろを指さした。

「ここの道を少し行った所に騎士が待つてゐる。そこで再び聞くとい
い

「そうですか。有難うございました

私は男性にそう言って体を折り曲げる。私は男性にお辞儀をしてか
ら男性の指した方、後ろへと振り向いて前に進もうとしたのだけど
それを先程の男性が遮る。

「あなたは何の用でこの城に？」

「私ですか？…妃を選ぶパーティーに招待されてしまいまして」「されてしまいまして？」

「あ、いえ…していただいたのですが、急用が入つてしまいまして…どうしても外されない用事なのでパーティーは辞退させていただく事にしたのです」

私がそう言つと男は意外そうな顔をした。うん。そうよね。第妃選びのパーティーって誰でも喜ぶとか思つていつのでしようね。そりゃ一世の中の女性は喜ぶでしょう。ただ喜ばない女性もいるのです。私は二口と微笑んで言つた。

「お時間をお取つさせて申し訳ありませんでした。それでは失礼します」

そう言つて私は一礼し、後ろを向く。そして私は一度と会つことのないだらつ王子様を一目見て思った。

(綺麗なお顔ですね)

私は相手が第一王子、フレイアル・ジョーンだということに気づいていた。正しく言えば、話しかけた後で気づいた。本でこんな場面があれば、気づかないだろう。ここで別れて、ヒロインが会場に戻る気になつてそこで偶然再会した王子様とヒロインは恋に落ちる。というのが王道なのだろうけど。私はヒロインでもなんでもないのでそんな恋には落ちない。王子様は綺麗な顔をしていました。…それで?私はやはり噂と事実というものは一致しないと思つた。流れていた噂とは全く違う印象を受けた。

3話 「まだ寝てるのって、まだ早朝でしょ……」

次の日の朝、私の目覚めは最悪だつた。何故かつて?…アイサの大聲で起きたからよ。

「エルー…まだ寝てるの?…」

「まだ寝てるのって、まだ早朝でしょ…」

私は眠たい目を擦りながらアイサに言つた。アイサは私の家なら自分の家のように入つてくる。私を毎朝起こしに。私は朝に弱いほうなの。だから、アイサに起こしてもらつてるんだけど…最近では起こし方が何だか雑なのよね。その理由は分かっているのだけれど。

「まだ怒つてるの?パーティーの事」

「ありえない!何でパーティーに参加しなかつたの!…しかも第一王子に会つているのに!」

そう。アイサの不機嫌の理由は、私がパーティーの途中(というか、まだ始まつてもいない時点)で抜け出してきた事。そしてうつかり第一王子にも会つたつて言つてしまつてそれからアイサの機嫌は悪いまま。

「パーティーから二日も経つたのに」

「怒つて当然でしょ!折角、男に興味のないエルーに興味を持たせるチャンスだったのに!」

あ。アイサの目的つてそれね!可笑しいと思ったのよ。あの令嬢を怖がつてるアイサが私を令嬢の群れに行くのをすすめるなんて。

「別に興味がないわけじゃないわよ？ただいい人が現れないだけよ
「いい人を見つけようとしているでしょ」

私はアイサにそう言われて黙る。私は相手を探そうとしない。とい
うか、そういう気もない。そんな私にアイサは色々と心配をしてく
れてるみたい。別に心配するようなことじゃないと思うんだけど
ね。

「そう思つたから送つておいたわよ」

「…何を？」

「お手紙を」

天使のように、にっこりと微笑む友人がこの時私には悪魔に見えた
…。大体、本人を無視して私の名前で手紙出すってどういうことよ
！しかも第一王子宛てに。庶民が気取つてると思われるじゃないの
！というか！またあの地獄のような場所にいかなければならぬの
？！

「あ、今日お返事が来ていたの！さつき内容を読んだら是非ともお
会いしたいらしいわよ…」

私は頭を抑える。この面倒見のいい友人がここまでお節介だと思わ
なかつたわ…し・か・も！何で第一王子も是非ともお会いしたいな
どとー私はアイサに引きずられながらそんな事を考えていた。

「はあ…」

私は大きな溜息を、大きな立派な門の前でついた。何で一度もこの

ような場所に来なければいけないのよ。本当なら私はあの家で今頃、のんびりと過ごしているはずなのに！私はそう思いながら目の前の大きな門を睨みつける。いきなり会うと言われても、私がドレスを用意しているはずなく、結局アイサのドレスを借りた。のはいいのだけど…

「派手」

ものすごい派手。何でこんなのを持つてるのよ。私は薄水色のドレスを身にまといながら思った。だいぶ抑えた色のドレス。アイサの家にはものすごい色したのがいっぱいあつた…私はそろ一つと門の中に入つていく。ああ…これで暫くは地獄だ…私はトボトボと歩いていく。途中であつた侍女さんに第一王子様はどこですか。と聞いたら笑顔で応接間に案内してくれた。

「フレイアル様はもうまもなく来られます。少々お待ちください」

笑顔で一礼してから出ていく侍女さん。私はソファに座りながら王子様の登場を待つ。私が案内された応接室は応接室だけあって豪華だった。なんというか…

(居心地の悪い部屋)

普段、こんな豪華な部屋を使わない庶民の私にとつて居心地の悪い場所でしかない。この部屋の人を見なければいけないのね…全部アイサのせいだわ！私が心中でアイサに怒つていると、扉が開いて第一王子様が現れた。

「…待たせてすまない。初めまして、というべきか？」

「いえ、三日ぶりでござりますわねフレイアル殿下」

私はそう言って一礼する。庶民にしてはでかい態度なのだろうけど……いいわよね？これくらい。別に無礼ってわけじゃないし……第一王子様が座るのを確認してから私は先程のソファに座った。

「…」

豪華な部屋の中に侍女さんが入れるお茶の音だけが響いている。私と第一王子様の間には会話はなく、ただただお互い黙つているだけ。そんな時、扉からもう一人誰かが入つて來た。私が扉の方を見るとそこには笑顔を浮かべた男性が立つており、その笑顔は苦笑いにも見えた。私は挨拶をすべきか迷つたのだけれど、その人が着てる衣服を見てかなり高貴なお方であるため、立ち上がつた。

「初めまして。エルシア・サマーーと申します。以後よろしくお願ひいたします」

私はそう言って頭を下げた。というか、今気づいたのだけれども。これは庶民の私が知つている礼儀作法であつて高貴な方々とは全く違うもの。無礼になつてないかしら。そんな私の不安をかき消すかのように田の前の男性は笑顔で言つた。

「僕はシタリス・ジョーン。よろしくエルシアちゃん！」

私は目の前の男性 シタリス様が王子であることに驚いたと同時に初対面から馴れ馴れしく『エルシアちゃん』などと呼ばれた不快感を覚えた。しかしそれを露骨に顔へ出すわけにもいかないので、心の中に止めておいた。

「シタリ…なぜ来た」

「だつて、兄上だと会話が弾まないでしょ？僕が来たときも無言だつたじゃないか」

シタリス様に問うたフレイアル殿下は、そう言い返されて黙つた。シタリス様は私よりも少し年下で、それでも身長は私と同じか、少し高いくらい。人懐っこい性格のようで、初対面の人にも知人のように接している。一方フレイアル殿下は私と同世代にも関わらず、大人のような雰囲気を出していて、身長は私の頭一個分高く、体も目立つほどではないにしろ、がしつりしている。クールそうで近寄り難いけど、流石この国の王子つて感じ。後半は朝、アイサが噂を私に話していた。：勝手に。

「エルシアちゃん、座つて」

シタリス様が私にそつ言つたので私はソファに座つた。：一つ、疑問に思う事があるの。

「何故、シタリス様は私の隣なのでしょうか」

私は、私の隣に当然のように座るシタリス様にそう問い合わせた。普通、フレイアル殿下の方に座るのでは？などと思っているとシタリス様が笑顔で言った。

「だつて、エルシアちゃんの隣に座りたいんだもん」

私は思わず、顔を歪めそうになつた。男が『もん』とか言つても、可愛くはないのですが。逆に気持ち悪いです。なんて言えるはずもなく、私は不快感を隠すため微笑んだ。

「それで、エルシアちゃんは昨日のパーティーには来なかつたの？」「はい。急用が入つてしまい、どうしても参加出来ない状況になつたため、仕方なく辞退いたしました」

「ふうん…で、エルシアちゃんは兄上を見るの初めてでしょ？感想は？」

シタリス様は私にそう問つてきた。これは答えなければいけないよね…私は言葉を選びつつ、そんな言葉を心の中で呟いた。何故かこの質問にフレイアル殿下も食いついているようなので、あまり無礼な返事はできない。

「感想と申しましても…噂通り、素敵なお方、凛としたお方だと」「本当に？」

「はい。何故、嘘を申さなければいけないのですか？」

私はそう言いながら首を傾げる。おもいきり嘘をついているのだけどね。仕方ないじゃない。反逆罪とかで死ぬのは嫌よ。そんな間抜けな死に方。私の質問にシタリス様はまた、笑顔で答える。

「いや、本当にやう思つてゐるのかと思つてね。他の令嬢とは目が違う気がして」

「それはそうでしょ。私は庶民ですよ？令嬢様達と比べられるなど恐れ多い」

私は少し困ったような顔をしてシタリス様に言つた。令嬢達と比べられるのは間違つてゐると思う。けど、恐れ多いとは思つていなのが私よ。つてこの前、アイサに言われた気がする。

「やう？エルシアちゃんは令嬢と比べても恥ずかしくないと思つよ？」「

「お褒めのお言葉、ありがとうございました」

私は微笑んでそう言った。思つてもないことを言つて。私は心の中で、シタリス様を睨んだ（あくまで心の中）。

「僕の勘違いかもしないね。エルシアちゃんは兄上のお嫁さんになる気はあるの？」

「…私はどちらかと云うと、フレイアル殿下の事を尊敬しております。ですので、妃の地位に立ちたいというよりも、一国民として応援をしたい、ということになってしまっています。ですから、妃になる意思は持つておつません」

私は先にフォローの言葉を入れてから、その気はない事を伝える。これで無礼にはならない…ハズ。といふか、断つてる時点で無礼なのよね。ただ私は国民として、見守つていきたいというのは本音だし、嘘は言つてない。…あ、言つてる。尊敬つてのは嘘です。

「ええ！？無いのに手紙を送つたの？」

「えつと…それは、なんといいますか…私を心配した友人が、勝手にフレイアル殿下に手紙を送つてしまつたようとして」

私が言うとシタリス様は残念というふうな顔をした。何が残念なのか私には分からなかつたけれど、一応微笑んでおいた。

4話 「…慣れつて怖い」

フレイアル殿下にお城へ招かれてから一週間が過ぎた。私は何も起こらない、平和な日常が帰つてくるのだと思っていたのだけれど、現実はそうも簡単に行くはずなく…平和な日常はまだ、帰つてこないようだつた。

「エルー。もう朝だよー」

私はその声で朝をむかえた。あの一件からアイサの機嫌は見るからによくなり、いつも通りの優しいアイサに戻つていた。

「おはよーアイサ」

「おはよーエルー。もうすぐできるよ」

私はその言葉に頷いて、いつもの、自分の席に座る。アイサは私のと同い年だけど、お姉ちゃんみたいに面倒見がいい。でも、そんな彼女にはダメな一面もあるわけで…

「おはようエルシアちゃん。今日も可愛いね」

私は目の前で優雅にコーヒーを飲むシタリス様を見て、失礼ながら溜息をついてしまう。アイサのダメな一面はこういうところだ。私を心配してくれるのはいいのだが、少し、やりすぎるとこがある。

「おはようございますシタリス様。相変わらず、このような場所にフラフラ来るほどお暇なんですね」

「エルー！ダメですよ」

ダメでしょっ…私が嫌味を言つ原因は全てあなたにあるのよアイサ。何でアイサは私の家に勝手に人を上げるのよ…私は今度は遠慮なく溜息をついた。シタリス様は一週間前、私がフレイアル殿下に招かれ、一日経つた朝、私が起きるとアイサと楽しそうに話していた。私ははじめビックリしていたもののシタリス様が家に来るたびに驚いていたので一週間たつた今ではまたか、という反応になってしまっている。

「…慣れつて怖い」

私は誰に聞かせるわけでもなく、そつと呟いた。それでも聞こえていたのか、シタリス様はニコリと笑った。アイサはいつも通りの反応で、ニコニコしながら上機嫌で朝ごはんを作つてゆく。それがシタリス様の分まで当たり前のようになつて、私は三度目の溜息をついた。

「溜息付いたら、幸せ逃げちゃうよ？」

「もう逃げているので大丈夫です」

私はシタリス様が言つたのに即答し、目の前の人間に一週間、疑問に思つていたことを問うた。

「何故、シタリス様は私の様な庶民の家に毎日毎日、来てくださるのですか？本来ならば、私の様な者がシタリス様ともあろうお方にお聞きするなど、あつてはならない事です。しかし、それでは私としても納得できないのでござります。よろしければ、教えていただかないでどうか？」

「え？ 兄上のためだけど？」

私はキヨトンとして答えるを見て驚くと同時に最悪な気分におちい

つた。兄上の為。つまりフレイアル殿下の為という事は私を妃候補に入れているという事だろう。私は頭を抱えそうになる。シタリス様は本気で言っているらしく、いつもの嘘くさい笑顔が消えている。：目の端で喜びを体に表し、ガツツポーズしているアイサを見て私は顔を歪める。

「だつてさー、兄上つて仕事ばかりで女性と関わろうとしなかつたわけ。エルシアちゃんの手紙に返信書いたのもネフェアリーだしさ」「ネフェアリー様？もしかしてネフェアリス様の愛称でござりますか？」

横からその言葉に反応したアイサが言った。ネフェアリス様？…「ゴメンナサイ。何言つてるのか全くわかりません。最近になつてようやく王子様達の名前を覚えた私にそんなそんな訳の分からぬ名前で呼ばれても困るわ。

「訳の分からぬ名前じやなくてネフェアリス様はこの国の宰相様よ」「宰相様？」

私は何故、アイサが私の心の中の言葉が分かったのかは棚上げにし、一番に（正確には一番）疑問に思つた事を口に出す。するとアイサは興奮したような、キラキラした目をして話し始めた。

「そう！ネフェアリス・ロード様。ネフェアリス様はフレイアル様と幼友達で、その容姿はフレイアル様と並ぶと言われているわ！しかも！フレイアル様とは真逆、シタリス様と似た甘ーい雰囲気を常にかもし出しているお方！！それでいて、とてもお優しい方だと噂になつてゐるのよ！ただ、既に婚約者がいると言う噂があるから、皆、鑑賞用として遠くから見てゐるわ。分かつた？」

私は頷く。力説ご苦労様です。宰相様はシタリス様と同じく、裏側

にとても厄介な性格をお持ちだと。私にはそんな噂は信じられない
ので一応、そう頭の隅に記憶しておいた。

「…取り敢えず、宰相様には注意ね」

「何か言つた？」

「いいえ？それより、よくそんなに知つてゐるわね。アイサ

私はほそつと言つた言葉を聞かれていなことがわかると、話を逸した。と言つても、元々気になつっていた興味のある話題に変えた、といつだけなんだけど。

「普通はこれくらい知つてるものよ。エルーが知らなすぎるのよ」「そうなの？」

「そうよ。聞いてくださいませシタリス様！この前までこの子、貴方様や、王女様、フレイアル様の事を殆ど知らなかつたのですわ！」

「えーエルシアちゃん酷いー僕のこと知らないなんてー」

子供がすねたような真似をするシタリス様を私はちらつと見て、準備できた朝ごはんを食べ始める。一人はそんな私を見て、もう反応しないと思ったのか自分達も朝ごはんを食べ始めた。

私は今、お城に来ている。何でかつて？お手伝いよ。私はお金があり余つてゐわけじゃないのでこうしてたまーに何かお手伝いをさせてもらひうの。いつもは侍女さんのお手伝いをしてるのだけれど、今回は少し違うらしい。なんでも、王女様のお世話ををして欲しいとかなんとか。これも侍女さんたちの仕事なんだけど…私は少し嫌な予感をしつつ、前を歩くシタリス様についていく。王女様は現在、
アルバイト 8

歳。しかし、8歳にしては完璧な立ち振る舞いをするとか。そして王女様もとてもお綺麗で素晴らしいお方だそうで。そう考へているうちに、シタリス様があるひとつ扉の前で止まつたので私もその数歩後ろに立ち止まる。私は今、侍女さんが着るような服を着ている。侍女さんにこの服を渡された時、少しだけ目に哀れみが見えたのを私は見逃さなかつた。

「エルシアちゃん。冷静にね」

シタリス様はそう言つて扉をノックし、少しの間を開けて扉を開いた。声は微かに聞こえたのでそれが合図のようね。私は侍女さんに教えてもらつたお辞儀をして部屋に入った。うん。なんだか、侍女さんが私を哀れみの目で見たの、わかつた氣がするわ。シタリス様が扉を開いた瞬間、小さな女の子がシタリス様を待ち構えていたよう立つていた。

「シタリス様。無理だと思います」

私は前にいるシタリス様に向かつて小さい声で呟く。私の直感では、とても私には抱える事の出来ない人だと思っているの。雰囲気がそういう語つているもの。

「そこをなんとか！エルシアちゃんだったら大丈夫だよ！」

同じように小さく呟くシタリス様に私は小さくした声で主張します。

「私にはあのお方の世話をして冷静でいられる自信がございません。よつてこのお仕事は辞退」「ダメだよ！サリーがエルシアちゃんを見ちゃつたもん。もう、辞退できないよ」「……」

シタリス様は必死に私を王女様の世話を付かせようとしている。私は小さく、誰にも聞こえないように溜息をつくと、シタリス様を見て頷いた。シタリス様はホッとしながら放置していた王女様に向こう直り言った。

「サリー、新しく君の世話をする侍女を連れてきたよ

「お兄様は侍女さんと仲がよろしいのですか？」

幼い声でそう問いつてきた王女様にシタリス様は笑顔を見せるだけ。

「お兄様。その者と一人で話をしたいのですが

「ああ、僕は外すよ。部屋の外にいるから終わったら呼んでね」

シタリス様はそう言って部屋の外に出ていった。私は王女様に向き、自分の自己紹介をした。

「お初にお目にかかります、エルシア・サマーーと申します。本日からあなた様の身の回りの世話をするよう、言わせております。よろしくお願いします」

「ええ、よろしく。それよりあなた、お兄様とはどういう関係なのかしら」

私は思った。この方はブラコンなのね。私はそんな事を冷静に判断しながら言った。

「私とシタリス様の間には何の関係もないません。王子と一国民にすぎませんが」

「一国民なら何故、お兄様とお言葉を交わしているのかしら？」

私はその言葉に、冷静に言葉を返す。

「王子が国民と言葉を交わして何がいけないのでしょうか？あなた様も私と言葉を交わしているでしょう」

「私はお兄様、と言つたはずよ。私と言葉を交わしている事はどうでもいいわ。けど、何故庶民のあなたが、王族であるお兄様とあんなに親しそうに言葉を交わしたのかしら？」

私はその言葉にピクリと反応した。どこにかと云ふと、親しそうに言葉を交わした、というところよ。親しそうに？王族と親しそうに話すわけないじゃないの！

「あなた様には私とシタリス様が親しそうに言葉を交わしたように見えたのですか？」

「ええ。違うのかしら？」

「はい。それは誤解でござります」

「でもお兄様は侍女に笑顔など見せない人よ？」

私は先程のシタリス様を思い出す。確かに私に向かつて笑顔で説得しているわ。それかしら？けれど、あれはいつものことよ？もしかして、シタリス様は王女様の目が届くところでは侍女さん達には笑顔ではないのかしら。…シタリス様、余計なことをしてくださいますわね。

「それはあなた様が知らないだけでござります。シタリス様は普段、とても素敵な笑顔で皆に接しております」

「そうなのかしら？」

「私に聞くより、『本人様にお聞きした方がいいのではないですか。呼んでまいりましょうか？』

「そうね。お兄様を呼んできてちょうどいい

「かしこまりました」

私がそう言つて扉の方に振り向くと王女様は私を呼び止めた。私が
王女様の方を向くと王女様は言つた。

「あなた様ではなく、サリーと呼びなさい」
「かしこまりました、サリー様」

とにかく、面倒な事はシタリス様に押し付けることにしました。

4話 「…慣れっこ怖い」（後書き）

話が長くなつたので一旦、区切れます。

エルシア、面倒なこと（サリー様）をシタリス様に押し付けました
ww

5話 「えべ 生活の為で」（前書き）

遅くなりましたーすみませんm(—)

それと前回に比べてかなり、短いです

5話 「ええ 生活の為です」

「お兄様? ビリーヴ事で御座いますの?」

「えーっと…」

私はシタリス様から向けられる助けの眼差しを無視し、お茶を入れる。今、サリー様が私が話した全ての事をシタリス様本人に確認中。先程、部屋を訪れたフレイアル殿下はソファでその光景を眺めておられます。…助けては、いないわ。

「どうぞ」

「ああ、ありがとうございます。本当に侍女をやつているんだな」

「ええ。生活の為です」

私はフレイアル殿下のお言葉にそう答えた。私はここまでフレイアル殿下と会話ができるようになりました。…全く嬉しくないのだけど。第一、こんな庶民の、しかも素人に近い人を何でサリー様の部屋付きにするのよ。

「エルー、お兄様にお茶を」

「かしこまりました」

私は一礼してサリー様とシタリス様のお茶を用意する。何故か愛称でサリー様に呼ばれている私。フレイアル殿下によれば、サリー様が誰かを愛称で呼んでいる所を初めて見たと言つてらつしゃいますが…全く嬉しくないのよ。少なくとも他の侍女さんより好かれてるつて事でしょ?…嬉しくないわね。

「サリー様。御用意できました」

「そこに置いといてちょうだい。わあお兄様。お茶でも飲みながらお話をいたしましょ」「う

満面の笑顔で言うサリー様。その笑顔に顔がひきつるシタリス様。しかし、その笑顔を見せられて断れるはずもないシタリス様は渋々ソファーに座った。サリー様はフレイアル殿下を見ると微笑んで、言つた。

「フレアお兄様は侍女さんとお知り合いなんですか？」

「ああ、一度会つていてな。それがどうかしたか？サリー」

流石フレイアル殿下。回答に困ることなく返事したフレイアル殿下は逆にサリー様に聞き返した。

「いえ、何もありません。エルー菓子は…」

「御用意にしあります。ハーブのクッキーでよろしいですか？」

「ええそれで。こんなに優秀な侍女、なぜ今まで見かけなかつたのでしょうか？」

優秀？…褒められているはずなのに私はその言葉をいただいても全く嬉しくないのはどうしてかしら？

「それは彼女が部屋付きや、表に出る仕事をしていなかつたからだろ？」「う

「そうなのですか？それなら仕方ありませんわねえ。さて、お兄様。そろそろ本当の事を教えてくださいますか？それくらいの事、直ぐに言つてしまつては？」

私はサリー様とフレイアル殿下の間に菓子を置く。と同時に、シタリス様を見て首を横にふつた。それはもう言つてしまつては？つと

いう合図。シタリス様はそれを読み取ったのかとても沈んだ顔になつた。

「サリー……話さなきやダメかな?」

「お兄様はその程度の事で私に隠し事をなさるのですか?」

疑問を疑問で返され、シタリス様は俯いた。そして決心したように顔を上げると、サリー様に話し始めました。サリー様はシタリス様をじっと見て話を聞き、フレイアル殿下はそんな二人を見て優雅にお茶を飲み、私はそんな二人に目をやることもなく、淡々と侍女さんがやる仕事をやつている。

シタリス様がサリー様から解放された頃、サリー様のお部屋にある男性が現れた。多分、宰相様。宰相様はサリー様のお勉強を教えてらっしゃると、サリー様ご本人聞いた。

「初めてましてエルシアさん。ネファリス・ロードと言います。サリ一様のお勉強を見させてもらっています」

「初めてまして宰相様。エルシア・サマーーと申します。本田からサリー様のお世話を任されておりますので、以後お見知りおきを」

私はそう言つて一礼する。宰相様は笑顔で一礼した。…ヤバイヤバイ。その美貌は誰もが見とれ、惚れるものなのだろうけど、私にとっては厄介な人にしか見えなかつた。それからサリー様はお勉強を始め、シタリス様とフレイアル殿下は優雅にお茶を飲みながら、その姿を見ておりました。

「エルシアちゃん。お茶ちょーだい」

「分かりました。フレイアル殿下はぜひつなさこますか？」

「ああ頼む」

「はい」

私はコップを下げる新しい物へと変え、それにお茶を注ぐ。途中、シタリス様の邪魔が入ったものの、シタリス様を相手にしながら、お茶を入れる。邪魔をしてくるシタリス様にキレなかつた私を褒めて欲しいものだ。

「お待たせいたしました」

「ありがとうございます」

フレイアル殿下はそういつてお茶を取る。思ったのだけれど、フレイアル殿下は必ず、何かをしてくれた相手に対し、お礼を言う。そんなの当たり前だと思うかもしれないけど、実際には全く違う。他国のある国では当たり前のようになつてている侍女さんの名前すら、覚えていないらしいのだから。それに比べればフレイアル殿下は優しい方だと思う。王族にしては。

「どうかしたか？」

「あ、いえ。申し訳ありません」

どうやら私は考へてゐる間、ずっとフレイアル殿下の顔を見つめていたようだ。私は謝罪の言葉を述べ、またまた、侍女さんの仕事を淡々とこなしていく。

5話 「ええ 生活の為です」（後書き）

近々、キャラ紹介を出そうと思っています。

えーっと、主人公と作者が進行で進めていく形で。

出すのは、ヒルシア、アイサ、フレイアル殿下、シタリス様の4人。

サリー様とネファリス様は登場が少ないのでまた多くなつたら。
そういうや、アイサの名前出してないな。

なんて思つてたらキャラ紹介書けばいいんじやね?
という発想に達しましたw

最近、忙しいので、毎日更新は難しいと思いますが、1週間に何回
かは更新するのでよろしくお願いします！

…今思つたら、フレイアル殿下もそんなに出でないな…

作「こんにちわーー美奈と申します！」

工「宣言通り出てきたわね」

作「出てきましたよー。本編にでるつもりは全くないので、こういうところで出ておこうと思つて」

工「ふーん。そういうえば、作者の作品いっぱいあるわね。短編オンリーだけど。続編とかもあるわね」

作「いや、連載もあつたんだけど、複数すぎて話こんがらがっちゃつてさあ…一からやり直しました」

工「なんだか、この話が無事、完結するのか心配になつてきたわ」

作「大丈夫だよ…多分」

工「自信がないのに大丈夫とか言わないでよ。つて雑談はここまでにしてキャラ紹介に入るわよ」

作「…はい（なんだろう）この主導権を取られた感）まず始めに、エルシアが住んでいる国とかいろいろ説明します」

ミフェス王国のファス。

ファスはミフェス王国のほぼ中心部にある街。と言つても貴族などはおらず、エルシアなどの庶民が多く住み着く街。この街は特に技術が発展しており、服の質も、他の庶民と比べれば良い方。エルシアはそんな街でアルバイトをしながら生活中。この街は技術が発展しているにもかかわらず、人出が足りていなくて、アルバイトなどは有り余っている。

エ「…短」

作「はう！それ言わないで！若干氣にしたんだからー次からはキャラ紹介。登場順のはずです」

エ「…（若干なんだ）」

エルシア・サマーニ 16歳 女

見た目は一般的な庶民だと本人は思っている。が、所々のパーティが整つていて美人とまではいかないが平凡とも少し違う、というふうな顔立ち。髪の色は蒲公英色^{たんぽぽいろ}。光が反射するたびにキラキラと光り、ツヤがある髪。胸あたりまで伸びている髪の毛を両端に少し残して後ろでひとつにまとめるのが彼女の基本的の髪型。目は金色。身長は155cmで少し平均より小さいくらい。性格は面倒事が嫌いで、恋愛感情には鈍感。後は少し鋭い。

フレイアル・ジェーン 16歳 男

見た目はクールな印象が強いフレイアル。第一王子で、国王がいい時期を見て国王の座を譲るそうだ。女性にあまり興味がなく、自分の結婚相手など考えなかつたフレイアル。今は、少しエルシアを意識しているはず。クールな印象が強いものの、その整つている顔で侍女さんや国中の女性を虜に。周りの男性陣からの評判はいい。ただし、國中の男性陣がどう思つているかは別。髪の色は瑠璃色^{るりいろ}。ツヤがあるその髪は、耳に掛かるくらい伸びており、その色がまたクールというか。目はスカイブルー。身長は170cm。性格は自分の事はしっかりとするタイプ。自分に向けられた感情にはすぐに気づくほど鋭いが、それは恋愛感情を除いて。エルシアと同じく、恋

愛感情になると鈍感。

アイサ・カルーラ 16歳 女

エルシアの友人であり、お姉さん的な存在。見た目はおしとやかなお姉さんという印象が強い。庶民らしく平凡な顔立ちをしているがよく見れば所々整っている。髪の色は黄赤^(きあか)。目は紫。エルシアとは違い長さは肩までしか髪がないので髪飾りを止めている。身長はエルシアよりやや高い156cm。性格は普段は気遣いのいい人々のだが、一つ相手に心配することがあれば余計なことをしてしまう厄介な性格。しかし、それは親しい人物以外にやりすぎてしまう事はない。恋愛感情などは鋭い。

シタリス・ジェーン 14歳 男

フレイアルの弟であり、フレイアルの嫁としてエルシアが一番適していると考えている。本人達は気づいてないが。シタリスとフレイアルの関係は義兄弟であり、母親が違う。しかし、そんなことで争うこともなく、シタリスはフレイアルに世話を焼いている。（普通は逆なのだが、女性関係になると世話を焼いている）髪の色は菖蒲^(あやめ)色。目は空色。髪の長さはフレイアルとは違い、短い。しかし、ものすごい短いと言う訳でもない。身長は157cm。性格は意外に悪戯とかが好きなタイプ。普段は常に笑顔だが、家族どいるときは様々な顔を見せる。

作「一通り今出でてきているキャラは終わったね」
エ「あと一人だけど、その一人はもう少し出番を待つてからにするの？」

作「うん！流石に出番少なことをに紹介するよつ、あことをに紹介したほうがいいでしょ？」

エ「そうね。さて、キャラ紹介も終わった所で、次回予告」

作「はい！次回はフレイアル殿下の視点で書きたいと思つてます！」

エ「それでは

作・エ「また次回、お会いしましちゃう。」

キャラ紹介 1（後書き）

作「」でお知らせ。文中に出でてくる様々な色の参考「」のサイトからしております

『<http://www.color-guide.com/index.shtml>』

色を探してみてください！

沢山載つてました！

分からぬ事があれば聞いてください！

さてさて。次回は書つたとおりフレイアル殿 下視点で書いつかと思つてます。

作者が女なので上手く書けるかどうかはわかりませんが…
つて普通でもアレなんですけど（・_・ ^ ^）

では、また次回お会いしましょう。

ここまで読んでいただきありがとうございました（ーー）アリ
ガトウ

HIN様の心情（前書き）

今回お宣言していたとおり、フレイアル殿下視点。

サブタイキ「王子様の心情」にしています。

……いい名前が思いつかなかつたんですよ(つ)

とつあえずどうぞー

王子様の心情

俺、フレイアル・ジョーンは正直、女が嫌いだ。

正確には俺に媚びてくる女が嫌いだ。そんなの誰でも嫌いと思うが、俺の場合は第一王子という立場上、そういう女しかいない。しかし、俺はこの16年生きてきた中で初めて自分に媚びを売らなかつた女に出会つた。エルシア・サマーニ。彼女の名だ。彼女と初めて会つたのはパーティーの時。妃を選ぶパーティー。俺はその時、仕事を抱え込み、少しパーティーに遅れていた。

ようやく仕事が終わり、俺が執務室を出た瞬間、一人の女が俺に近づいてきた。

「あのつー」

俺は声をかけられ一瞬、顔を歪めるが、直ぐに元の顔に戻す。相手も気にしていないようだった。女からいつも聞かされている吐き気がするほどの言葉が出てくると思いきや、彼女が言った言葉は意外なものだった。

「失礼ながら、表門はどうちらに御座りますでしょうか」

「表門、か？」

正直、予想していなかつた言葉に目を見開く。そのまま、彼女の後ろを指さした。そしていつ。

「」の道を少し行つた所に騎士が待つてゐる。そこで再び聞くといい

「やつですか。有難ひびきいました」

彼女はそう言って、丁寧にお辞儀をした。しかし、そのお辞儀は綺麗ではあるものの今まで見てきた令嬢達とは異なっているものだつた。そして、俺の答えを聞いて直ぐに帰るやうとした彼女を、俺はなぜか止めてしまつ。彼女が不思議そうにしているのを見て俺は問いかけた。

「あなたは何の用でこの城に？」

実際、そんな事を聞いたと思つて引き止めた訳ではなかつた。反射的に止めたから、俺は直ぐさま質問を作つた。

「私ですか？…妃を選ぶパーティーに招待されてしまいまして」

その時俺は、僅かながら喜びを感じた。それがなぜだか、未だに分かつていなゝが、とにかく喜びを感じた。しかし、俺はふと疑問に思つた事を口に出す。

「それでしまいました？」

文が明らかに嫌そうだつた。その時感じた。自分の目の前にいる女は、そこらへんの令嬢とは違う。服装から見て庶民だろうが、どうしてそんなに嫌そうに話すのか。俺が疑問に思つていると彼女は何かに気づいたように言い直した。

「あ、いえ…していただいたのですが、急用が入つてしまいまして…どうしても外されない用事なのでパーティーは辞退させていただく事にしたのです」

明らか、嘘だらう。完璧な笑顔、完璧な口調だが、何かに気づいた顔をした時点でバレている。しかし、その切り替えの速さに俺は驚いたと同時に、意外だった。女の中にはこんなにも頭の回転が速い者がいたのか、と。

「お時間をお取りさせて申し訳ありませんでした。それでは失礼します」

そう言つて彼女は丁寧にお辞儀をしてくると俺に背をみせ、歩いていく。俺はその彼女の背中を見ながら思った。あの女は絶対、俺の正体に気づいている、と。根拠はない。しかし、そう断言できた。

彼女が去つてから俺はパーティー会場へと出向いたわけだが、令嬢との会話が一切記憶に残っていない。あの、不思議な女の事で頭がいっぱいだった。パーティーが終わり、俺は再び執務室に来ていた。ネファリーに会うためだ。あの、パーティーを一から行なったあいつならわかるだろうと思つたからだ。彼女の名前が。

「はい?」

「いや、だから。今日、庶民の女来てただろ? そいつの名前教えろよ」

俺がそう言つとネファリーはキョトンとした。ネファリーとは幼い頃からの知り合いで、色々と心を許せる存在なのだ。そのネファリーゲ俺を変なものを見る眼で見てている。

「…なんだよ」

俺が不機嫌気味で問うと、ネファリーは言った。

「頭がおかしくなった？」

「お前がネファリーじゃなかつたら死刑確定だな」

「僕じゃないと言わないつて。てか、言えないつて」

ネファリーがそういうのでそれもそうかと思つ。第一王子にそんな口自体きかないだろ。…こいつは別だが。

「で、何でそんな事言つたんだよ」

「だつて、あのフレアが、女の子に、しかも庶民に興味を持つんだよ？驚かない方が無理だつて」

「…」

言い返せなかつた。俺自身でもそつ思つからだ。自分が、あの女に興味を持つたことに自体、驚いているんだから。

「で、どんな女の子？」

「確かに、髪が蒲公英みたいな色で目が金色だ。ドレスは若草色

「……ゴメン。僕、会場で若草色のドレスなんて見てないよ？」

「…あ、忘れてた。確かに、俺が行く前に帰つたと思うぞ」

「ええ！？」

驚くのも無理ない。俺だつてあの女から帰るつて言われてびっくりしたんだから。ネファリーがパーティーに出席した女達の名前を確認していく。ネファリーの目が止まつた。見つけたのだろう。あの女の名前を。ネファリーは少し、困つた顔をして言つた。

「フレアが言つてる子の名前は多分、エルシア・サマーー」

「…珍しいな」

俺は自信がなによつてこうネファリーを不思議に思つた。ネファリ

一はおそらくこの国一番の情報を持っている。宰相だから当然、と思うかもしれないが国民に分かつて城の人間にわからないことは多い。しかしこの男は自分が不安にならないようにとことん調べる。だから、こいつの情報は信用できる。けど、そのネファリーが自信のない顔をしている。ネファリーは苦笑いして俺に話し始めた。

「うん。この子の情報は、分からぬ事が多過ぎる。家族構成、当人がどういう人物なのか、どこで生まれたのか、どこで育ったのか。意図的に探られないようとしていた。わかるのは名前と年齢だけ」「…結構やばいんじゃないか？」

そういう人間がこの国に存在するのはヤバいんじゃないか。俺はそう思った。そいつが他国の奴として、何もわからないとなると色々と面倒な事が起きる可能性がある。政治的にも、個人的にも。しかし、ここで俺の中ではある疑問が浮かんだ。

「そんな人物を、何で候補に入れたんだ？」

可笑しい。何故、危険性が高い人物を妃候補に入れたのか。そんな人物、はじめから外していればいいだけだ。

「これは僕の予想だけどね。多分この子はそんなに危険じゃないと思うんだ」

「は？」

「だつてもし他国の奴だったらもうとしつかりとした個人情報を作り上げると思わない？」

確かにそうだな。俺はネファリーの言葉に頷く。そして少し、考えてみた。俺だった場合はそうする。じゃあ何故この女の情報はわからぬのか。

「…わからないな」

「だよね。けど、謎が解けたよ」

「何の？」

「フレアがパーティーに集中していなかつた謎が」

俺はその言葉を聞いて、顔が引き攣った。俺はそれほどわかりやすかつたのか。ネファーリーの顔を見る限り、かなりわかりやすかつたのだろう。ネファーリーがニヤニヤしてゐるを見てそう思つた。ネファーリーはその顔のまま言った。

「取り敢えず、その女の子と話をしないとね」

「話す意味がわからない」

相変わらず「ゴーゴー」しているネファーリーを見て抵抗するのを諦めた。
それから三日後、俺は再び彼女と対面することになる。

HIN様の心情（後書き）

やつぱ、异性の感情は書くのが難しい。
後、口調とか？

私が書いていて思ったことは、Hルシア視点で書いていたキャラの
イメージが変わった。
つてことですかね。

ネフアリーはなんか口調が滑らか?だから思つてたのとだいぶ違う
し。

フレイアル殿下もイメージがだいぶ変わりましたw

では、読んでくださつてありがとvびやこますーー!

6 話 「なまかんのやうな質問をへ」（漫畫）

今日は結構短めです。

6話 「なぜそのような質問を？」

今日も、私の周りは絶好調のようだ。

「サリー様、そろそろお勉強の時間が…」

「ネファアリー！後にして頂戴！今、エルーに教えてもらつてるんだから！」

「でもサリー、エルシアちゃんにも自分の仕事があるし」

「お兄様は黙つていてください…」

私の周りで絶好調に言い合うネファアリス様とサリー様、そしてシタリス様。私はサリー様に花言葉を教えていただけで、勉強に支障はないようにしていた。けど、予想以上にサリー様が気に入ってしまい、今この状態が出来上がった。

「サリー様、花言葉はお勉強が終わつた後にいたしましょう」「でも…」

「そうですね。お勉強が終われば、サリー様が大好きな菓子をお出ししますよ？」「

「ネファアリー！やるわよ！」

「頑張つてくださいませ」

サリー様は張り切つて勉強に取り掛かる。流石に立ち振る舞いは8歳以上でも、中身は普通の子供とは変わらず、大好きなものを出されれば気合が入るサリー様。ネファアリス様は私に感謝の眼差しをかけ、サリー様の勉強に取り掛かった。ネファアリス様とは、数日しか会つていなければ話を交わすくらいには親しくなつた。そして、いつもその話題はフレイアル殿下になっている。相手が一方的にフレイアル殿下の話をするのだが、そこに何の目的があるのかしら。

「シタリス様も、フレイアル殿下のお手伝いをされてはいかがでしょうか」

私はのんびりと椅子に座り、お茶を飲むシタリス様に向かつて言う。フレイアル殿下は誰もいない執務室で仕事をするのに疲れたのか、最近は何故かサリー様の部屋に大量の書類を持ってきて仕事をしている。先程の五月蠅い中で、仕事ができるのもすごいと思うが。

「兄上は自分でやつてこそ意味があるって言つてるからいいんだよ」絶対に言つてないと思う。だつてフレイアル殿下頭を抱えてらつしやるし。シタリス様はそんなことを気にしないようにお茶を飲む。この人は本当に王子なのだろうかと内心思つてしまふのは無理ないだろう。

「そうですか」

私はそう言つて自分の仕事に取り掛かる。思つても表には出さない。出してはいけない。仕事はもう慣れたのだけど…流石に一人でやるのは疲れる。サリー様のお部屋には部屋付きの侍女が私しかいない。理由を聞くと、扱いが難しすぎて皆嫌がるそうだ。慣れたら結構、いい子なんだけどね。

「エルー！」

「なんでしょうか」

「エルーは大事な人はいるの？」

サリー様から問われた質問に私は固まる。いきなりなんの質問をしてくるかと思えば、大事な人はいるかという。私は、いつもどおり

の笑でサリー様に問い合わせる。

「なぜそのような質問を？」

「えっと、その…ね？ エルーみたいなお姉様がいたらいなーって」

もじもじ言うサリー様は本当にそう思っているらしい。私は一瞬、本音を言いつぶやくが、それをグッと抑えて笑顔で言う。

「そうですござりますか。私には大事な人はいません」

私が言うとサリー様は喜んだ。けど、「ゴメンなさい。私、誰とも一緒になる気ないの。私はサリー様の姉にはなれない。私はそんな思いでサリー様の後ろ姿を見ていた。その、無邪気に笑うサリー様は、いつかの私のような笑顔だった。

当の昔に無くした、無邪気な私の笑顔のような。

6話 「なぜかのやつな質問を？」（後書き）

今回はエルシアの過去がちらりと見えました。

エルシアの過去には一体何が！？

次回は、そんなエルシアの過去を描きます！――

あるところに、それはそれは、よく笑う可愛い女の子がありました。その女の子は、周りの子とは少し違っていました。

その女の子は、国で一番えらい女の子だったのです。しかし、女の子はまだ幼くて、そんな事は分かっていました。

女の子はすくすくと育ちました。

素直な性格、誰もが魅了される顔立ち、そして、悪を知らない純粋な心。

誰もが、そんな女の子を大好きでした。

女の子は、8歳の誕生日をむかえます。しかしその誕生日は、悲しい日になってしまいます。

女の子の住んでいる国には、揉めている国がありました。燐国です。

女の子の住んでる国は、緑が豊かで、自然に恵まれていました。

燐国は、自ら領土にある自然を伐採してしまいました。

そして、燃料が少なくなつて困った燐国は、女の子の国に攻め込み、我が物としよう。

そう考えました。

勿論、女の子の父である国王様は、何とか戦をしないように燐国と交渉しました。

しかし、燐国の王様は、それはそれは、欲張りな人間でした。

女の子のお父さんが出した条件を飲み込まず、ついには女の子の国

に攻め込んできたのです。

それが女の子の誕生日。

しかし、悪夢はまだ終わりません。

街が火の海となつていく中、女の子のお父さんとお母さんは自分達の子供だけは逃がそう。

そう思いました。

女の子には3人の兄がいました。

一番田は18歳。二番田は14歳。三番田は12歳。

女の子は3人の兄達にとても懷いていました。

女の子の両親は、そんな兄達に女の子を任せました。

両親にとって女の子は、女の子の一族の唯一の希望だつたからです。女の子の兄達も、その事を分かつていました。

しかし、男の子といつてもまだ子供。

そんな4人に燐国は容赦しませんした。

はじめは一番上の兄が、次は二番田の兄が燐国の兵に立ち向かっていきます。

最後に残つたのは、女の子と三番田の兄だけでした。

「大丈夫。大丈夫だよ…」

三番田の兄は、呪文のようにその言葉を呟きました。
何度も何度も。

しかし、神様は意地悪でした。

女の子の田の前に兵士が立ち塞がります。

三番田の兄は、女の子を守るように兵士に向かって剣を構えました。そして、三番田の兄は女の子に向かって言います。

「エルシア！……振り返らずに走れ！必ず、後で俺が探し出すから！」

兄はそう言つと女の子に一つ、ロケットペンダントを渡しました。それは、女の子の誕生日プレゼントだと家族全員で女の子のために選んだ物でした。

女の子はそれを受け取ると走ります。

兄の言いつけ通り、暗闇の中、一度も振り返らず、一度も鳴き声を上げず、静かに泣きながら。

どれほど時間が経ったでしょう。

森を突き抜け、一つの村が見えてきた時、女の子は足の力が抜けていくのを感じます。

けれど、女の子は体中の力を足に集め、地面を蹴り、村の中へ駆け込みます。

村の中は賑やかで、楽しそうです。

女の子は村に入った途端、崩れ落ちました。

体力の限界でした。

最後の力を振り絞り、どうしたのかと聞いてくる村人に女の子は言います。

「助けてください」

と。

やがて女の子はその村の男女に引き取られました。

その男女はそれから数日後、少し離れた王国、ミフュス王国のファスに移り住みました。

女の子は一人で暮らせる年になるまでその男女に引き取られていましたが、自分が誰か。

どこから来たのかなど、一切話しませんでした。

そんな女の子に不安を抱きながらも育ててくれた男女。女の子は大変感謝しました。

女の子が12歳になると、女の子は家を出ます。

しかし、男女はそんな女の子を温かい目で見送りました。

「また戻つておいで」

と言ひながら。

やがて女の子は、少女へと成長し、人生で久しぶりの友人ができました。

アイサ・カルーラ。友人の名です。

明るくて、お姉さんぽい彼女に少女は兄達を重ねたのかもしだせん。

8歳の時のことが原因で、少女は王族が嫌いです。

そしてなにより、面倒事を嫌うようになりました。
平和が一番。少女はそう言います。

少女の胸元には、それはそれは綺麗な口ケットペンダントが光っています。

少女はその口ケットペンダントを肌身離さず持っています。
いつの日か兄が自分の事を見つけてくれると願い、その印を光らせ
ているのです。

その口ケットペンダントの中には家族の写真が入っていて、開けた
ところにはこう書いてあります。

『エルシア誕生日おめでとう。あなたの傍にはいつも私達がつい
ています』

と。

こうしてエルシア・サマーーから、無邪気な笑顔が、純粹な心が、
人を愛するという感情が、誰かに甘えるという感情がなくなりまし
た。

それでも未だ彼女は、家族の帰りを待っているのです。

戦後、女の子の国の中にはある噂が流れました。

自然の国、エール国が滅んだ。しかし、エール国の生き残りがいる。
といふ噂が。

7話 過去（後書き）

エルシアの過去が分かりました。

何か楽しくもないし、シリアルスにもかけてない感じがする…

ま、まあ過去がわかつたところこのとど…！

次回はまだ考えてないので…

頑張つて考えます…！

読んでいただいてありがとうございました…！

8 話 「お勉強はやれなこのですか?」(前編)

遅くなりました!!

短いですが、どうや

8話 「お勉強はされないのですか？」

「サリー様は未だ、はしゃいでます。」こちらへんは子供らしさなと思う。でもね…？

「サリー様！お勉強をしてくださいませ！」

「ちょっとネファアリー！いい気分なの！邪魔しないで！」

「サリー様…」

必死に勉強するよつに説得するネファアリス様のお姿が、虚しいわ…先程から、喜んで勉強が手につかないサリー様。それを叱るネファアリス様。その様子を苦笑しながら見ているフレイアル殿下とシタリス様。私はといふと、その光景を眺めながら侍女の仕事をしている。

「エルシアさん！」

「…どうして私を呼ぶのでしょうか？ネファアリス様」

諦めたかと思ひきや、私を呼んだネファアリス様は何故か私の手を取つて助けを求めてきた。

「エルシアさんが言つたらすると思うんです！お願いします！」

「…あの、結果は一緒になると思うのですが」

「大丈夫です！エルシアさんなら…」

…私はどれだけ期待されているのかしら。無駄だと思うのだけど…私はネファアリス様の勢いに押され、サリー様の元に向かう。サリー様は鼻歌を歌つて踊つている。…それだけ嬉しいのかしら。

「サリー様」

「何かしらー！エルー！」

嬉しそうに振り向いたサリー様に、私は言ひつ。

「お勉強はされないのでですか？」

「…しなきゃいけない？」

しゃんぽりしていうサリー様。そこで私は思った。サリー様はお勉強が好きではないのだと。まあそうでしょう。この年頃ならば外で走り回りたいのでしょうね。私は暫く考えて言つた。

「お勉強が終わりましたら、菓子を食べてからお城を探検いたしましょっ」

「本当ー！」

「ええ。本当でござります」

「約束よエルーー…ああネファーリーー…さつさと終わらすわよーーー！」

簡単に食いついたサリー様。…わかりやすいわね。私は苦笑して元の位置に戻る。すれ違う時、ネファリス様にお礼を言われたが、微かに寒気がしたのはなんだつたんだろ…？私は首を傾げながらサリ一様が必死に勉強する姿を眺めていた。

侍女の仕事が全て終わり、家に帰った私は久しぶりにゆっくりした。サリー様が寝るまでが侍女の仕事で、それまで帰ってはいけない。普通は侍女塔つてところで寝るんだけど私は侍女塔が苦手で…仕事に遅れないならいいと、許可を取つて自分の家に帰つている。

「つづかれたー…」

私はベッドに身を投げ出す。柔らかくなく少し硬いベッド。私の胸元で金色のロケットペンダントが跳ねた。私が唯一、常に身につけている物。まあいわゆる形見つて奴かな。私はそれを手に持ち眺めた。勿論中の絵を。

「兄様達、今頃、どんな大人になつてたのかなあ…」

私の呟きは暗い静かな部屋に消えていく。誰にも届くことなく、静かに。後、数日が経てば、あの口がやつてくる。私にとつて最悪な一日が。この国に来てから、私は自分の情報を探れらないようにブロックしてきた。自分が母国の生き残りだと悟られないよう、ブロックしてきた。

この世界には『魔法』がある。しかしそれは限られた一部の人間しか使えない。だから一般人の私は使えない事になつてている。使えるのは、先代から魔法を引き継いでいる人間、魔法師の卵。魔法師。それに表立つて魔法が使えると公表していない者。私は表立つて公表していない者の類に入る。情報をブロックしたのだつて、そういう為にある魔法。自分の魔力の存在を消す魔法だつてある。

私の家系は『先祖様から魔法が使える。兄様達も使えるし、勿論、お母様達だって使える。私と兄様達は魔法を使える者同士の間に生まれた子供。つまり、使えない者と使える者の間に生まれた子より、力が強いらしい。だから大抵の魔法は使える。私の場合はもつと他の魔法も使えるんだけど。まあそれは置いといて。

「寝ようかしら」

明日はいつもより早く城へ出向かないといけない。何やら他国の国王が直々に挨拶に来るだとか。だから早く寝ないと、遅れるかもしれない。

「あ。アイサ元の忘れてた…ま、いいや」

私はそう言つてベッドに潜つた。やがて、瞼が重たくなり、私は襲つてくる睡魔へと意識をやだねた。

8話 「お勉強はやれなこのですか？」（後編）

えへへ… エヘヘ出でやめた魔法設定……！

いや、特に表立つて出るかわからないんでけだし、でも魔法設定を
出せて嬉しいです…！

では、読んでいただいてありがとハジマコます……！

9話 「申し訳ありません。記憶リセットをさせた」（前書き）

今回のエルシア、機嫌悪いです。

9話 「申し訳ありません。記憶にござりません」

どうして、私の周りには面倒事が降り注いでのくるのかしら。嫌がらせですか？神様。今日は朝早く城に出た私。そんな私は意味がわからない光景を目にした。

「どうして皆様、正装ではないのですか」

王族は基本、他国の王族や行事などがある場合は正装を着るのが常識。なのにこの方たちといえば、普段と同じ格好をしている。しかもフレイアル殿下まで。

「今日は正装でなくていよいよ。他国の国王様がそうおっしゃったとお父様が言つたもの」

「…そうじやりますか」

私は腑に落ちないような顔を隠して笑顔で言つた。他国の国王はそれほど変わり者なのだろうか。

「他国の国王様は何か探し物をなさつてゐるようですね。私もお手伝いできないかしら」

「どうでしよう。お手伝いできたらいいですね」

サリー様はそう言つと昨日と同じようにはしゃいでいる。私は皆様にお茶を出したりして侍女の仕事をやつていた。そして他国の国王が来るという知らせの鐘が鳴り、私達は急いで城の門の前に集まつた。私はサリー様の部屋付きなので、サリー様の後ろに控える。そして鐘が三回鳴つた。他国の国王が来たのだろう。私達、侍女は全員体を折り曲げる。王族のサリー様は他国の国王が来たら正式な礼

をする。侍女達は他国の王族がすきるまで顔を上げてはいけない。それが決まりだ。

「お会いできて光榮です。サリーナ・ジョーンと申します
「こちらに会えて嬉しいよ。小さなお姫様」

会話が交わされる中、私は少し顔を歪めた。小さなお姫様つて。暫くしてまた三回の鐘が鳴る。他国の国王が城にはいられた。そういう知らせだ。私は顔を上げて、小さく悲鳴を上げた。誰だってあげるわ！行つたと思った人が間近に居たら！！他国の国王は私を見ていった。

「エルシアかな？」

私は驚いた。というか、知らない人間が、いきなり自分の名前を呼んだらびっくりするに決まってる。私は驚きを表に出さずに言った。

「そうですが」

私が言うと目の前の人間はにこりと笑つた。違う。この人は国王じゃない。改めて周りを確認すると、違う場所にこちらを見ている中年男性を発見した。じゃあ、この人は？

「僕はサフィア・バージル。覚えてない？」

サフィア・バージル…？私は記憶を探り、出た結論は。

「申し訳ありません。記憶にございません」

いや正直あつた。それらしき名前の人には昔あつたことある気がした。

が、今、そんな事を言つたらまた面倒なことに巻き込まれるに違いない。じゃあ隠していよう。そういう結論にたどり着いた。まあ会つた事ある気がしただけで、本当に会つたかは覚えてないんだけど。

「そりなの？…残念。それじゃあサリー・ナちゃん、エルシア、また会おう」

そう言つてその人は城の中に消えた。サリー様は驚いて声が出ないらしく、私の顔を凝視していた。それは他の皆も同じで、唯一、ネファリス様だけは興味深そうな顔をしていた。

「エルシアちゃん。さつきの人知り合い？」

「知り合いであります。何回言つたら分かっていただけるんですか」

私は少し怒り気味で言つた。この会話、さつきから何回目。しかも相手がその度に違う。ネファリス様から始まり、フレイアル殿下、サリー様、侍女さん達、侍女頭、女官頭、騎士、国王様、王妃様、そしてシタリス様。というか、国王様と王妃様が来た時は正直焦つた。嫌という感情が表に出でないかとか、なんで来るんだとか。で、最後のシタリス様は困った顔で聞いてくるからまた頭に来て。冷静でよかつた。

「一国の王子が話しかけたからビックリして…」

「私も驚きました」

安心したように言つた言葉に私は言つた。私だって驚いた。そして

ムカついた。サリー様はさつきから落ち着きがない。フレイアル殿下も。というか、皆ソワソワしている。それがまた、イライラするといふかなんといふか…

「え、エルー。そろそろ王子様はお話し終わったかしら」「どうでしょうね」

サリー様があの方を相当気に入ったのか王子様と呼ぶようになった。王子様って…まあそういう年頃なのかもしれないわね。

「サリー様、少し落ち着いてください」「や、そうね。落ち着きましょう」

そう言って深呼吸するサリー様。と、フレイアル殿下。フレイアル殿下には行つてませんけど。と、思つたらシタリス様も深呼吸をしていた。…もう勝手にやつてください。私がそんなことを思つていると、部屋の中にノック音が響いた。その音でサリー様が少し固まつた。私は扉の前へ行き、開ける。するとそこにはサフィア・バージル様が立つてた。

「や。お邪魔しても?」「どうぞ」

私は脇に退いて、道を開けた。

「サリーナちゃん、フレイアル殿下、シタリス君。待つたかな?」「いえ、大丈夫です。お座りください」

サリー様が言うとバージル様はニコリと微笑んで座つた。その前にはサリー様、フレイアル殿下、シタリス様。そしてその後ろにネフ

アリス様が立つていて、私はお茶をいれている。そのお茶を出して、扉の傍へ立つと、直立不動。指示があるまで動かない。

「「」の度はお越しいただきありがとうございます」

そう言ってフレイアル殿下が挨拶をすると、ほかの三人も頭を下げた。そんな四人を前にバージル様は困ったような声を出した。

「頭上げて。僕、そんなに改まるの好きじゃないんだ。だから敬語もなしでお願いしたいんだけど」

「…そちらがいいのなら」

「うん。じゃあそつして。僕の事はサフュニアでいいよ」

その瞬間、サリー様の顔が輝いた。

「サフュニア様はエルーと知り合いなんですか！？」

「え」

え、ちょ、何で私が出てくるのよ。私が戸惑つてるとバージル様は言つた。

「うん。エルシアは覚えてないみたいだけど。子供の頃から知ってるよ」

「子供の頃のエルー…どんな感じですか？」

「そうだねえ。可愛かつたよ。なにをやるのも素直で」

「お一人とも」

「なあに？」

「他人の事を喋らばず、『自身の事をお話なさつてください』

私はそう言った。あまり、自分の事を人にばらされるのは良く思わ

ない。良く思う人なんているのがどうかもわからない。そんな雰囲気を感じ取ったのか、お二人ともその話題ではなく自分たちの話題に切り替えた。

9話 「申し訳ありません。記憶が戻るかもしれません」（後書き）

うん。

やつぱヘルシアは面倒」とに巻き込まれますね（・_・ < >）

締りのない終わり方になりましたが…

次回、頑張ります

1-0點「…………玉砲」（漫畫）

今回おひなして、中途半端で此こりや。

10話 「…………出まや」

夜。他国の王族を歓迎する、盛大なパーティーが開かれた。それはもう、私にとつて地獄のパーティーでしかない。そして私は油断していた。侍女として、パーティーに参加するのだと。なのに……。

「どうして私が！」

「エルシアちゃんもリストに入ってるんだってば」

「リストから消せばいいじゃないですか！」

「無理なんだって」

「大丈夫です！私がネファーリス様に言つてきます！！」

何故か私はリストに入つていて、侍女ではなく、国民として参加させられることになった。今回のパーティーを管理しているのはネファーリス様なのでネファーリス様に掛け合えば……！

「ネファーリーが楽しそうにリストに入れてたんだけど？」

もうやだ。

「……意地でも出ません」

「もう言われても……」

そつ言つて苦笑するシタリス様は、何かを思いついたように言つた。

「アイサちゃんも来るよ？」

「アイサと私は別です」

「美味しい食事もいっぱい出るよ？」

「…………出ます」

結局、食べ物に負けた。：いや、城に出る食べ物はやつぱり美味しいのよ。私が言つとシタリス様はニコッと笑い、部屋を出でいった。私が今いるのはサリー様の部屋。今サリー様は、お着替え中である。暫くしてシタリス様が真っ赤なドレスを持って来た。そして満面の笑みで私に言った。

「こんなドレスでどう？」

「拒否します」

「どうしてー？」

物凄い驚いた顔をしているシタリス様。え？何？私の返事に何か問題でも？

「私は派手な色が嫌いです」

「じゃあピンクとか？」

「…シタリス様の派手の基準はどうなつてているのですか？普通、若草色とか、黄緑とかでしょ？」

私が言うとシタリス様は不思議そうな顔をした。：ものすごく頭にくるんですけど。そりゃ、シタリス様からすれば地味で、眼中になかつたかもしれないけど、私にとつたら一番落ち着く色なのよ。私が顔をしかめるとシタリス様は苦笑して言った。

「せめて青とか…」

「…水色なら」

私がそう言つとシタリス様は楽しそうに部屋を出でいく。それとすれ違ひに、サリー様がそれはそれは可愛らしい格好で走ってきた。

「エルー…エリカ…」

そう言つてくると一回転するサリー様。サリー様はピンクのフリフリのドレスを来て、髪に綺麗な髪飾りをつけている。私は一回りと笑つていつた。

「よくお似合いですよ」

「本当? よかつた。エルーもパーティに出るんでしょ?」

「…はい。出ますよ」

「じゃあ、サフィア様と踊れるわね!」

サリー様は何を期待なさっているのか、ワクワクしている。まあ踊れるよ。絶対に令嬢様達に睨まれるでしょうけどね。その後、何故かこちらもワクワクしながらドレスを持ってきたシタリス様に、何故かワクワクしている侍女さん達に私は飾られた。そして数分後。

「まあ! よくお似合いですわ! -

「みちがえりましたわねえ」

「はあ…」

何故か褒められた私は何を思つたかといふと…全体的に重いわ! 何か、ネックレスやら、髪飾りやら、ブレスレットやら…元々つけていたものを合わせると凄い重い。この場で数個外したいんだけど侍女さん達が怖いので、また後でにする。侍女さん達は何を思ったのか、香水を持ち出してきた。

「え?」

「これもつけないと

「そうよね」

「いや、あの、香水は止めてください」

それから少し、私と侍女さんの攻防戦が続く。が、最終的には付けられた。もう嫌だ。私の体の周りに匂いが充満している。その匂いが爽やかな匂いだった事が唯一の救いね。どうしてパーティー前に疲れたのかしら。意味がわからないわ。私がサリー様の部屋を開けようとするべく、中がやけに騒がしい。不思議に思つて扉を開けるとそこには国王様と王妃様がいた。…もう何でもありだわ。

「おおエルシアか。入れ入れ」

「エルーちゃんじゃない！あらー可愛くなつたものねえ」

「国王様に王妃様…」

今私の前にいる国王様と王妃様が世間に衝撃を与えたお方。それは凄い身分差婚で、ラブラブつぶりが半端ないのだとか。まあ今も手を繋いでらっしゃるのだけど、せめて子供の前では控えて欲しいと思つるのは私だけかしら。

「…お父様とお母様はなががよくてこまります」

国王様と王妃様を見てそういうサリー様は苦笑していた。8歳にここまで言われてそれでもイチャイチャする親つて…私は苦笑してから言つた。

「国王様に王妃様。そろそろパーティーが始まるのではないですか？」

「あら？…もうそんな時間かしら？」

「もうそんな時間か？」

「…もうそんな時間ですよお母様、お父様」

子供に呆れられながら注意される親つてどうなのだろうか…

「はあ……」

「溜息つちやダメよ。エルー」

私が溜息をつくと隣で声を潜めてアイサにそう言われる。私だって溜息なんてついちゃいけないって分かってるのよ。ええ。分かっているわ。けどね。

「この状態で溜息をつくなとこいつの?」

「…無理ね」

何故か先程から令嬢達に嫌味をグチグチ言われていたら溜息もつきたくないなるでしょ!苦笑するアイサはさっきから令嬢達を見てビクビクしている。前に言ったと思うのだけど、アイサは令嬢達が苦手なのよ。私だって苦手。けど、部類が違うの。私は面倒だから関わりたくないだけ。アイサはこういう嫌味を言われるから怖い。という風に、私は怖くはない。アイサは怖い。さっきからアイサの顔が引き攣っている。

「あら、庶民の小娘が頑張ったわねえ」

「そうね。目立ちもしないのを頑張って着飾つたものだわ」

おほほと口元に手を当て上品かもわからないように笑う令嬢達に私はうんざりといった感じで答える。

「すみません。他国の中王様が来ていると知り、気合が入りすぎてしまいましたわ。そちらは私達に言うだけあって綺麗なお姿をしておりますわね。元々の顔がわからないくらいですわ」

にこいつと笑つて私は言つ。すると令嬢達の顔が笑顔で引き攣つた。アイサは慌てた様子で私を見ている。何を言つているかといふと、厚化粧ですわねと言つてゐる。そして香水くさい。鼻が痛いくらいに。

「あ、あなた何を言つてゐるのかしら?」

「私は褒めただけですが?どう聞こえたのでしょうか?」

「…い、いいわ。『機嫌よう』」

そう言つて去る令嬢達に心中で思つ。弱いなーと。令嬢達は迫力はあるものの、何故か私の返しに簡単に負けるので面白くない。退屈だ。

「流石エルーだわ。また丸め込んだのね」

「弱すぎる。全然楽しくないわ」

「それにも、どうしてこんなに沢山の令嬢様達が私達に話しかけてくるのかしら」

そう、それなのよね。この前のパーティーでは話しかけてすらこなかつた。なのにどうして、今日に限つてこんなにも嫌味を言われるのかしら。そしてその会話の全部に着飾つて、という単語が入つてゐる。そりや今回はシタリス様から貸していただいた城のドレスだから質がいいし、色もきれい。でもそれだけでしょう?どうして私が先程までの令嬢達の嫌味を思い返していると一つ引っ掛かつた。

「…アイサ。原因が分かったわ」

「え?うそ。何?」

「行けばわかるわ」

私はそう言つて一步踏み出す。アイサもその後に慌てた様子で続き、私達は歩き出す。会場の中央部へ。私達二人が中央部へたどり着くと、嫌味の原因達が雑談していた。

「あ！ エルーじゃない！」

「エルシアちゃん！ 来てくれたんだね！」

「やあエルシア。楽しんでいるかい？」

私達二人を笑顔でむかえるお三方。その他にもフレイアル殿下にネファリス様、後知らない人がその三人を保護者の目で見ていた。いや、一人というべきだ。一人は私の後ろに熱い視線を送り、その送られた方も熱い視線を返している。

「…アイサちょっと」

私はアイサに振り向いて小声で話す。

「あなたの恋人つて城で働いてるつてどうして言わなかつたの」

「え？ あ、だつていう必要ないかなつて」

「…いや、あるでしょう」

私はそう言つて溜息をついた。どうやらアイサの恋人は城で働く人だそうだ。…ああ鬱陶しい。その熱い視線が。そのやり取りほかの場所でやつてくれないかしら。

「…エルー。思つてることがおもいつきり顔に出てるんだけど

「じゃあちよつとは自重しなさい」

「…はい」

熱い視線はなくなつたものの、じつとお互いを見つめ合つているア

「… イサ達。… それって自重しているつてなるのかしら。私は小さく溜息をつき、知らない人に向かつて挨拶をする。

「初めまして。アイサの友人のエルシア・サマーーと申します。以後お見知りおきを」

「初めまして。フレイアル殿下の護衛と共に騎士団長を勤めているフイリイ・ジャーヴァスでアイサの恋人。よろしく」

「… 恋人と発言する時に赤面するの止めてください。アイサも…」
私がぼそっと言うと二人は固まって顔を真っ赤にし、俯いた。その動作が面白くて、私は声を殺して笑った。正直、アイサの恋人が騎士団長だったとは驚いたけど、アイサにお似合いの人だったんで安心した。

「それよりエルーー！ どうして私の所に一番に来てくれないの？」

「そうだよ！ 僕達待つてたんだからね！」

「エルシアの事だから来ようなんて思つてなかつたんでしょう？」

「… だからってこんなややこしい事しないでください」

ややこしい事。それは、このお三方が私の特徴やら、何かを言つてそれで令嬢達に嫌味を言わせ、どうしてだろうと私が疑い、そして私が何とかしてココにたどり着くという事だ。… 本当にややこしいやり方で呼んでくれたわ。おかげで訳の分からぬ嫌味を言われてアイサが怖がつたじやない。

私はネファリス様の前に立つと挨拶をする。今日の目的といふか、今の目的は令嬢達に言われた嫌味のストレスをこの方にぶつける事だから。元々この方がいけないのよ。

「お久しぶりですわね。ネファリス様。今回はパーティーにお招き

いただき《・・・・・》ありがと「いざれこまわ」

私は二口と笑う。

「いえいえ。エルシアさんにはいつもお世話になっていますから。
お気に召して頂けましたか?」

同じく二口と笑つて私に言つネファリス様。私はそれに笑顔で答
えた。

「ええとても。お食事は大変美味しいですし、元気のいいご令嬢様
達もお話していただきましたから。私が気に食わないのは、どうし
てあなたの手にそれ《・・》があるのでしょ?」

私はそう言つて二口と笑うのを更に深くする。ネファリス様の体
がびくっと震え、手に握っているものにより一層力を込める。

「もう一度聞きます。どうしてあなたの手にそれ《・・》があるの
でしょう?」

「…あなたを世話をした侍女から受け取りました。忘れ物、だと」「
「そうですか。それはありがとうございます。では、返していただ
けますね?」

私がそう言つとネファリス様はこくりと頷き、右手を前に出してき
た。私は右手の下に両手をだし、それを受け取る。次に開いた時は
はいつも身につけているハズの物があった。私は自分がそれをどん
な表情で見ていたかは知らない。私が顔を上げると、皆が固まつて
いた。

「…あの?」

「え？ あ、ああ。何かな？」

「どうかしましたか？ 何か失礼なことをしましたでしょうか？」
「別に、なんでもないよ？ うん、なんでもない」

ネファリス様はそう言つてニコッと微笑む。私は不思議に思いながらも、そこまで気にしてはいなかつたのでネファリス様に挨拶をしてその場を去つた。と言つても、用がなくなつたので先程居た位置に戻るだけ。

「エルー」

「ん？ 何？ アイサはいいの？ あそこにいなくて」
「うん。それよりそれつて…大切な人に貰つたものなの？」

私が口ケットペンダントを首につけると、アイサが遠慮がちに聞いてきた。私は微笑んで頷く。

「そりなんだ…」

アイサはそれ以上黙つて何も聞いてこなかつた。

1-0番 「…………玉井や」（後書き）

続くと云ふ事か……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3942z/>

面倒事に巻き込まれた！！

2012年1月5日21時51分発行